only KISS, only YOU

綺穂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

only KISS , only YOU

【Nコード】

N4179T

【作者名】

綺穂

【あらすじ】

ランデル大陸南部、フォグレスト帝国。
賢帝と名高いフォグレスト皇帝・ライオネル？世の元に嫁いだ私を待っていたのは、甘くも苦しい日々だった。

彼は、キスより先へは進まない。
離れられなくなるようなキスをしておいて、それ以上深く嵌まることを許さない。

ねえそれなら、
戻れなくなる前にどうか……

PV10万アクセス突破しました！
いつもありがとう
ごじゅいませす！！

はじめに

みなさま、「ONLY KISS、ONLY YOU」に興味を持って下さりありがとうございます！！

この作品は架空の大陸、ランデル大陸を舞台とした物語でございます。

多分最後の方までR15描写は入ってこないと思いますが、念のため掛けさせて頂きました。

どうぞご注意を。

更新については明言を出来ませんが、ゆっくりペースになってしまおうと思います。

章ごとにガバーツと上げていこうかなーとは考えておりますが^^

では、お楽しみください

00 : prologue

「どっしたんです？」

柔らかな寝台の上、仰向けになった私に被さっていた男が、まるで心配そうな顔をしてこちらを覗き込んだ。

端正な顔立ち。

長い睫毛に、すっと通った鼻梁。

濁りのない金糸は薄暗がりの中でも煌めいていて、碧い瞳は深海を思わせるほど澄んでいる。

女としての私の自信をいつも失わせるその面には、なぜだか今は苦悩が浮かんでいるように見えた。

「大丈夫……です」

私は、その視線から逃れるように横を向いて、そして意図せずして拗ねた口調で言った。

彼は綺麗な眉を寄せ、尚も食い下がる。

「……本当に？」

「はい」

そしてなにかを諦めたような溜め息が聞こえた瞬間、いつものように口付けが始まった。

いつも思う。

まるでこの口付けは、私のことを好きと言っているようだ。

ただ啄むような触れ合いから始まって、

段々と唇が覆われていつて、

舌でなぞられて吸われ、

そしてノックされる。

中で互いが、優しく、深く絡んで、

目が眩みそうなほど長い間、何度も何度も確かめるように角度を変えられる。

それが、いつもの彼のキス。

一度途中で、目を開けたことがあった。

どんな顔をして彼はこんなキスをしているのだろうかという、純粹な興味が勝ったから。

そうして視界いっぱい広がったのは、もう焦点が合わないほど、まるで深海を覗き込んだかのような気分陥るほど近く在った、碧だった。

目が合うと、彼は蕩けるような甘い顔を更に甘く歪めて、優しく微笑んでより深く舌を絡めた。

やめて。これ以上勘違いさせないで。

言い放ちたい言葉は、喉の奥で疼くだけ。私はただ為す術なく、また目を閉じた。

もう幾度、唇を重ねただろうか。

それでも彼は、私の素肌に触れようとはしない。いつも私が彼の首に腕を絡めたところで溜め息を吐き、そしてそっとな離れて、隣の寝台へ帰っていく。

そのたびに私は、泣き声押し殺しながら泣いた。

どうすればいいのかも分からない。
聞きたくてもそんなことは聞けない。
自分からねだることなんて出来ない。

怖い。

いらなと言われてるのが。

道具でいいはずだった。

私はただの道具のはずだった。

いつから私はこんなに欲張りになったのだろう。

分からなくて、また泣くのだ。

北の小国・ミスティアナ。

北に並ぶ3国の中央、東のドリズリン、西のトルネディアに挟まれ長く緩衝国として穏やかに発展してきたその国が、私の故国だった。

大河・フラトス川が形成する、比較的肥沃な平野が広がり、主な産業としては農業が挙げられた。

非常に閉鎖的な国民性からか、王朝成立時より国外への侵略の歴史はなく、祖先よりミスティアナは豊かな大地のみを活用してランドール大陸での地位を不動のものとしてきたようである。

他国へ行けばミスティアナ産の農作物が高値で取引されているのもその一例だった。

そしてミスティアナは、父帝・ロゼット？世が敷いた厳格な政治体制も高く評価されていた。

税収はかつてと変わらず、国政を回すには充分なほどには取っているものの、過去何百年と悩まされた冬の凍結期に、ロゼット帝即位以来民が飢餓で苦しむということが一切なくなった。

故にランドール大陸において父は「賢帝」と名高く、生きながらにして伝説とされていたのである。

「民に授けられたものは民に返せ」というのが父の信条。
皇族の義務は最も放棄してはならないものだった。

そして、南の大国・フォグレスト。

ランデール大陸の南部全域を支配する武力に長けた帝国。

ランデールで唯一金属物質・ラセドンを採掘出来、国家収入の半分
以上をその加工と交易で賄っているその国が、現在私が身を置いて
いる場所だった。

遡ること数年前。

北部西のトルネディアがミステイアナ領海を侵し、東のドリズリン
へ侵攻しようとしたのが切っ掛けとなって、元来好戦的な性格を持
たないミステイアナが大国・フォグレストと同盟関係を結ぼうとし
たことに、私の婚姻は起因する。

当時、フォグレスト皇帝は即位したばかりのライオネル？世。

前帝が崩御して間もなく、まだ国政も不安定だったフォグレスト王
朝もまたミステイアナと結ぶのを得策とし、事実上ミステイアナが
フォグレストに服属する形で、ライオネルとロゼット同盟が成立し
たのだった。

しかし次第にライオネル？世は国内でその力を強めていき、やがてその噂は父・ロゼット？世と並ぶ「賢帝」だとして、他国にまで漏れ聞こえてくることになる。

そしてフォグレストの政情が安定するにつれ懸念を抱くようになったのは、誰でもない父だった。

切り捨てられる。

一度として弱腰なところを家族に見せたことのない父が、そんなふうに漏らし始めた折、けれどフォグレストからミスティアナに対し、ある要求が為された。

すなわち、ミスティアナ側から忠誠の証　人質　を渡せ、と。

忠誠の証に差し出す人質とはつまり、皇族同士の婚姻の話だった。

ライオネル帝は、即位前後の複雑な継承問題騒動からか、即位後数年が経ち、20は半ばを迎えてもまだ妃を迎えてはいなかった。そこでミスティアナの皇女を正妃として迎え入れることにより、「賢帝」同士の結びつきを強固なものにしたかったのだろう、というのは、ミスティアナ帝国議会の面々が口々に私に言い聞かせた話である。

この時　　と言つべきか、ロゼット帝には子供が3人いた。
長男である皇太子・ジャック、次男であり公爵位を賜ったフォード、そして唯一の娘である私　レミリカ。

選択肢は他になかった。

傍系貴族の中にも妙齡の娘はおらず、皇族の中でライオネル帝に嫁ぐことが出来るのは私しかいなかった。

「皇族は民が平穏に暮らすための道具だ」とは、フォグレストへ発

つ前日の夜、父が言った言葉である。

激励よりも何よりも、そのたった一言が重く、私の肩にのしかかった。

それは私の身の振り方ひとつで故国の存亡が左右されるのだという、あまりにも過重な嫁入り道具だったのだ。

しかして、輿入れをしてから思い知ったことがあった。

フォグレストにはミスティアナと違い、後宮があるということ。すなわち、正妃との間に子をなさなくとも、後宮の女性との子を嫡出子として世継ぎに出来るということ。

……私のほとんど唯一とも言える役割も取り上げられるということだった。

ライオネル帝即位前後の騒動が、その後宮内部の闘争であったと、小鳥の群れのようにお喋りな侍女達が話してくれた。彼がそれによって、どれほど跡継ぎの問題に対して敏感になったのかということも。

後々の火種になりそうなことは決してしない。

それは「沈着なる賢帝」ライオネル？世を知る人は皆口を揃えて言うことだった。

まして、将来的に他国の影響を受けやすくなる嫡子　ミステリア
ナ出身王妃との子供をつくることなど、彼にとってはもっての他な
はずだ。

だから彼は私に触れない。

同じ寝室で休もうと、優しく情熱的なキスをしようと、素肌同士を
重なることなく日々は過ぎ、その間ずっと私は、まだ見ぬ彼の子供
の母親の影に怯えるのだ。

彼は私がどれほどこの縁談　この恋に焦がれたのかも知らないま
ま、私を焦がし尽くす気なのか。
もういい加減に気付いているのだろう嗚咽に気付かないフリをして、
これ以上私を惨めにするのか。

あの日から、私にはあの人だけだというのに。

フォグレスト・ミスティアナ間で同盟が締結され、それを記念する催しがフォグレスト国内で行われた。

その際、両国の友好関係を大々的にアピールするため特に皇族の参加は必至となっており、即位後は滅多に国を空けたことが無かった父帝もほとんど初めて、私たち家族を引き連れて南へと向かうことになった。

しかしそこには、実はフォグレスト側の思惑があったのではないかととも言われている。

同盟関係を結ぶミスティアナへ、政情を探るための間諜を送り込むためだったのではないかと。

政に直接的に関わっている人間達を国外へ出せば、それは比較的簡単に片付ける。

ミスティアナの帝都からフォグレストの帝都までは早くとも1週間、更に滞在を2週間とすれば、約1ヶ月半の間、ロゼット？世についての調査を本人に感付かれることなく行うことが出来るのだ。

というのも、結局は想像の域を出ないのだけだ。

ただ私がこの話にこだわるのは、その間中自分がずっとその帝都の美しさに浮かれ続けていたことへの、罪悪感からだ。

北部に位置するミスティアナの帝都には、あまり色が無い。

青や白という比較的淡泊な色が上手く折り合って、美しいけれど寒々しい光景ばかりが広がっている。

それに対し、あらゆる民族を飲み込んで形成されている国家のためか、フォグレストの帝都は多国籍で煌びやかだった。

見たこともない光景に、年端もいかない子供が興奮するのは摂理だ。あまりにも私が興奮しすぎるので、兄様達もそのはしゃぎように目を見張っていたほどだったけれど。

目につくのは真新しいものばかり。

耳に入るのは長調の楽しい音楽ばかり。

鼻をくすぐるのは甘いお菓子の匂いばかり。

ミスティアナは交易があまり発展しておらず、北部特有の大人しい短調の音楽が主流で、甘露も珍しいものとされていたために、忍んで城下に出ていった私を取り囲んだ賑やかな市は、それだけで私の心を掴んだのだった。

一方城内では、ミステリアナ皇女がいなくなったことに関してひと騒ぎあったようで、実は市に数人の衛兵が降りてきたらしいというのは、後々兄様達が面白可笑しく私に語って聞かせた話である。

しばらく私は市をぐるぐると回っていた。

先立つものは持っていなかったので、キラキラと光るガラス細工を手にして太陽に透かしてみたり、美味しそうな匂いのする方へふらふらと歩いていき、屋台の中を覗き込んだりするだけだったのだけ
れど。

ただ、知らない国の知らない土地でそんなことをしては、もう迷うこと必至である。

案の定私もそのパターンを踏み、そしてそろそろヤバいかな、と思い始めた頃、ところがよく通る低い声が頭の上に降ってきた。

「レミリカ姫……ですね？」

声を掛けてきたのは、真っ白な麻のローブを羽織った、見目麗しい青年だった。

土地勘がなければ絶対に脱出することは叶わないだろう狭く暗い路地裏で、男はフードを脱いで微笑んだ。

「お探しました」

その一言を聞いて、私は数瞬前まで彼を胡乱な目で見ていたことに恥じ入った。

そういえばここは他国であって、父の権限が及ぶ場所ではない。物珍しさに惹かれてミスティアナにいる時のように行動してしまっただけで、私が何かに巻き込まれた時、迷惑を被るのは私の家族だけではなかったのだ。

フードを脱いでようやく認識出来た、目立つ金髪と碧い瞳を持つ男に、私は深く頭を下げた。

「申し訳ありませんでした」

すると男は　一国の皇女が頭を下げるとは想ってもみなかったのだろう　ひどく驚いた顔をして、慌てて私の頭を上げさせた。

「別に謝っていただくために言ったわけではないんですよ？」

「ええ……」

でもご迷惑はおかけしましたもの」

「そんな、迷惑などでは」

「皆さんの貴重な時間を裂かせてしまったことに変わりはないま
せんわ。」

ライオネル帝の衛兵の方々にまでこんなに走り回らせてしまって…
…」

と、そこで男が目を丸くした。

「ライオネル帝？」

「……の衛兵の方でいらっしやいますでしょうか？」

我が国の衛兵の顔は覚えておりますもの。貴方はその中にはおられ
なかつたから」

すると途端、男は爆笑し始めた。

訳も分からず、思わず私が拗ねたように戸惑うと、彼は腹を抱え、
ひいひい悶えながら言った。

「俺は衛兵ではありませんよ、姫。ご到着直後の会見の時にもお会いしたはずですよ」

そこで私は言葉に詰まった。

初めて会う人間の顔は覚えられないんですなんて、皇族の言っていないことではない。

「……ごめんなさい、あまりにも疲れていたもので覚えておりませんわ」

しかし下手な言い訳はやはり下手な言い訳で、彼の笑いの虫は更に元気になってしまったようだった。

私はなかなか笑い終えない男を前にしながら、会見の場にいられるほど身分ある人間を衛兵と勘違いしてしまった申し訳なさもあって、途方に暮れるより他なかった。

やがて自分の致らなさにすっかり意気消沈した私を、彼は宥めるように誘うと、どんよりとした路地を躊躇いもなく進んで開けた高台へ連れてきた。

「フォグレストの都が一望出来ます」

そう言っただけで腕を伸ばした先にあつたのは、夕焼けに照らされた、色彩の賑やかな帝都。

その鮮やかさは一瞬で私の心を引き込み、思わず私は時も忘れてその光景に魅入っていた。

男は、そんな私を見て微笑んだ。

「ご機嫌は直していただけましたか？」

「……元々悪くはありませんでしたわ」

「でも、少し拗ねていらっしやっただけ」

そう言っただけでからかうように笑った、男の整った面立ちを見つめながら、私はどうしようもない胸の高鳴りを感じていた。

「ここは昔から俺の息抜きの場所なんですよ」

男は昔を懐かしむように目を細めた。

その瞳は目の前の鮮やかな帝都よりも先、私の目では届かないようなところを見ているようで、私はどこか寂しくなって顔を俯かせた。

すると頭上で、男がまるで可笑しそうに笑う声が聞こえた。

「今度は何を拗ねてらっしゃるんです？」

「……拗ねてなどいませんわ」

「……本当に？」

「はい」

そしてふと、男が至極真面目な顔をした。

「じゃあもう少し、笑顔を見せてください」

私の表情は、固まる。

「……は？」

「いえ、まだあなたの笑顔を見ていないな」と

「はぁ……」

「拗ねるか苦笑かびっくりかでしょう、あなたの今までの表情」

「まぁ……」

「だから、笑ってください」

そう言つて腕を広げ、にっこりと笑つた彼に、私は呆気にとられていた。

人間、笑えと言われて笑えるものでもない。

苦笑がダメというなら引きつった笑みはもつとダメなのだろうし、それ以前に自分が見たいから笑えなんてどんな横暴だ。

と、思いはした。

思いはしたけれど、なにぶん屈託なく笑う見た目年上の男が、荘厳な様相を浮かべ始めた大国の帝都を背に腕を広げている様はどこと

なく滑稽で、気付いた時には私はもう吹き出していた。

「本当に貴方って何者なんです？」

肺まで届かずに漏れていく息を懸命に押し留めながら、私は彼に問い掛けた。

彼は、口を大きく開けて笑う私に多少驚いた表情を浮かべ、けれど少し近付いて、そして顔を覗き込む。

「何者に見えます？」

悪戯っぽいこの口調だけは、年下のよう。

「分からないからお尋ねしています」

「自分から明かすのはあまり好みではありませんね」

「好みの話は聞いておりませんわ。

教えてくださらないと、気になって夜も眠れなくなってしまいます」

すると男はあえてとしか思えないほど恍惚とした表情を浮かべ、胸の前で手を組み合わせた。

「俺のせいであなただが眠れないとは……なかなかいい響きですね」

「……ふざけていらっしやいますね？」

「ええ」

そして今度はあくどい顔で笑む男を睨み付け、私はそつと溜め息を吐いた。

「教えてくださる気はないんですね」

「いいえ、ないわけではありませんよ。」

本音を言うなら、あなたに見つけていただきたいんです」

「見つける？」

「俺もあなたを見つめましたし」

自分の顔が、途端に真っ赤になる。

「それは……すみませんでした」

「ですから、謝っていただきたい訳ではありませんよ」

男はやはり、可笑しそうに笑う。

「今夜、お待ちしております」

「……今夜？」

「我が国主催の、舞踏会です」

最終的には自分の顔が、蒼白になっているのがありありと分かった。

気が付けば、視界の端で男を探している。

ぎちぎちに締められたコルセット、皮膚呼吸をさせないほどはたかれた白粉、合計したら赤ん坊より重そうなアクセサリーたちを身につけ、あとはひたすら愛想笑いを張り付ける。

涼しい顔してこなす経験値はついたけど、それでも苦手なものは苦手だ。

夜会と聞けば、とりあえず顔は歪む。

男を探すという目的がなければ、その舞踏会もきつとありふれた、退屈なものになっていたはずだった。

あの後。

男は再び訳の分からない道順で仄暗い路地を進み、訳の分からないうちに私は王宮の裏口に連れてこられていた。

「この垣根の穴、分かります？」

この穴から入ればきつと誰にも会わずにご自分のお部屋に辿り着け

ますよ。あなたは、正気を保ってさえいれば道を覚えるのはかなり得意らしいですから」

「……なんで」

「さっき通ってきた道。

あなたが所々、こっちに行かなくていいのかという目をしてらしたので」

よく見てる。

確かに、そんな目をしていたのかも。

元々の、彼に連れ込まれた路地に帰るなら絶対にここを曲がるはずなのには、何度か思っ、そのたびにニヤニヤしながら迷うこともなく歩いている男の顔を伺いもした。

昔から人の顔よりも、道を覚えるほうが得意だった。

浮かれすぎて周りを見ていなかった結果、市の中では迷ってしまったけれども。

男にはそれを、ほんの少しの間に悟られたのだろうか。

私の特技が道に迷わないことなら、彼の特技は人間観察では？

くだらないことを考えていると、気が付いたら至近距離に男顔があった。

「…………何を？」

「ああ、いえ、なかなか珍しい表情を浮かべてらしたので」

ニヤリと笑うその頬に、指を思い切り突き立てたい。
その破壊衝動を必死に堪え、私は深々と頭を下げた。

「…………本当に色々とお世話になりました」

するとその心の機微を読まれていたのか、思わぬ攻撃に合った。

「いえいえ。」

数時間後の再会、楽しみにしていますから」

また思わず苦い顔になったところに、男は息を数回短く吐き出す。

最後に素晴らしい爆弾を投げて寄越したものだ。

そうして私はその垣根を越えながら彼に申し訳程度に手を振って、
自室に素知らぬ顔をして戻ったのだった。

皆には、王城の中を探索していたら迷ってしまったということにしておいた。
下手に外に出て迷ってフオグレスト人の見知らぬ男に助けられたと言えは、父や侍女などは卒倒すると思ったから。

結果的にその問題は私の言い訳によりその場で解決し、間もなく私は、舞踏会のために飾り立てられることになったのだった。

ファンファーレが鳴り響き、歓声が上がる。

ミスティアナ帝とフォグレスト帝のお出ました。

フォグレストの拝謁の間 舞踏会場は、3段に区切られていた。

下段は白磁の座。

一般的な貴族階級の間人たちが通される、拝謁の間の大部分を占めている白床の広間。

中段は碧石の座。

上位の皇族（皇太子など、皇帝と近い血縁にある者）が通される、碧石が敷き詰められた部屋1室分ほどの壇。

そして上段は、玉の座。

皇帝とその妃のみが登壇を許された、遥かなる威厳を持つ壇。

それは権力の構造を、視覚で認識させることでその心理にも植え付けるという、いつかの絶対的権力者が詭えた空間だった。

この間を統べることがすなわち、国家を統べると言っても過言ではないはずという空気。

碧石の座にいてさえも、押し潰されてしまいそうになる。

ライオネル帝は、この空間にどんなふうに身を据えるのだろうか。

その思いは、興味に近かった。

玉の座にフォグレスト皇帝・ライオネル？世と父であるミスティアナ皇帝・ロゼット？世、加えて母のセノが姿を現した瞬間、一段下にいた私たち兄妹を包んでいた生暖かい空気が一転、鳥肌が立つほどの熱気になったのが、痛いほどよく分かった。

国家を動かす熱。

この熱が、皇帝への最早盲目的な信望が、帝政を敷く国家では必要不可欠なのだ。

なんて人間だろう。

即位直後で政情が不安定だなんて、よく言えたものだ。

見ていれば分かる。

皆若き皇帝に期待をしている。
よほど即位前後の騒ぎを上手く捌いたのか、それとも元よりの評価の高さか。

こんな熱は一朝一夕には作り出すことができないということくらい、私にも分かる。

例えばドリズリンで王に向けられていた、嘲笑にも似た冷たい空気。例えばトルネディアで皇帝に向けられていた、畏怖にも似た刺々しい空気。

どれとも違う、これは疑いようのない熱望。

ぞくりと、背筋に冷たいものが走った。

同盟など結んで、得られるのは決して益だけではないのかもしれない。

しかし同時に、背後から視線が向けられているのも感じていた。

その視線にあるのが獰猛な肉食獣のそれではなく、純粹な好奇心であることはすぐに分かった。

だから。

私も早く向きたい。
そう思った。

けれどそれはなかなか叶うことはなく、私はしばらくの間玉の座に背を向け、白磁の座へ手を振っていた。

そして、その時。

「レミリカ」と。

唐突に名を呼んだのは父だった。

突然のことに驚いて、思わず目を丸くしたのは言うまでもない。

そして振り向いた先で……笑む両親の隣に立つ、穏やかに笑む青年は。

昼間の見目麗しい青年を再び見た瞬間に、身体を駆け巡った驚きでない痺れは、もう例えようもないほど甘く。

ただ彼が身に纏っていたのは麻の質素なシャツではなく、シャンデリアの下で光沢を放つシルクの、この国の皇族男子独特の衣裳だった。

「また、会えましたね」と、悪戯っぽく細められた目は言っていた。

閑話：皇帝陛下の憂い事（前書き）

ライオネル帝視点です。

閑話 : 皇帝陛下の憂い事

正妃を娶った途端、大臣たちが次々に側妃の話を持ってくるようになった。

昨日は軍務大臣の娘、

一昨日は農務大臣の孫、

その前は外務大臣の姪、

その前は工務大臣の養女。

よくもまあネタが尽きないものだ。

もちろん、この話をすべて押し付けられてくる宰相は俺がどれも相手にしないことを知っているので、最初の2回だけは真面目な報告がきたものの今ではすっかり茶飲み話となっている。

と、そんな折。

「なあ、泣くってどういふことだと思っつ？」

俺はふと途切れた会話の間に、疑問を投げっていた。

もちろん訳の分からないはずの宰相クラストラー・レイズは、鳶色の目を丸くして首を傾げた。

「何がどういうこと？」

クリスは宰相である前に幼なじみという立場が先行するため、口調が軽い。

さすがに公式の場ではずいぶんと猫を被るが、普段はへらへらとした振る舞いをしながら、それはまあ辛辣な言葉をばんぼんと言ってくる。

城内で俺が最も信頼する人間の1人だ。

「泣くんだよ、いつも」

俺はティーカップをソーサーへ戻しながら、まるで世間話のように軽いスタンスを保った。

実際のところは、ひどく焦っているにしても。

そして、そんな機微はクリスにはすぐに悟られてしまうにしても。

「まだ手を出せてない姫さまのこと？」

案の定、賢しい奴は頭の中で独自の計算を終了したらしい。

俺は肯定をするために、苦い顔をしながら短く首を縦に振った。

「キスをした後、必ずだ。」

最初の方こそ気のせいかと思ったんだけどな……」

「ふーん」

「やっぱり駄目だったのか……」

「うーん」

「お前、真面目に考えてるか？」

「うーん」

「……答えるよ……」

「だって惚気にしか聞こえないし」

そしてクリスは、ふふふと不敵に笑った。

「案外、手を出してみるのもいいんじゃない？」

俺は明け透けな物言いに、思わず顔をしかめた。

彼女と初めて会ったのは、今から4年も前のこと。

まだまだ即位直後の若造だった俺は、何かと意見をしてくる議会を抑えつけるため、「賢帝」との結びつきを利用しようとした。

というのは建前で。

本当はミスティアナを実質的な服属国にすることで、ロゼット帝秘蔵の深窓の姫君を一目見てみたいという幼稚な魂胆があった。

そこには確かに、好奇心しかなかったはずだった。

だからこそかの少女が行方不明だと聞けば嬉々として探しに行き、けれど自分でも予想外なことに、それまで誰にも明かしたことのな

かった秘密の休息所にまで連れて行ってしまった。

なんの思惑も絡むことなく接した、漆黒の髪と輝くオレンジの瞳を持つ少女は、一国の皇女でありながら傲ることなく、貴族の女特有の気取った笑いではない、気持ちのいい豪快な笑顔を提供してくれた。

俺がその予定外の恋を、自覚するのは早かった。

この4年間、脇目も振らずに国政の整備に走り、幾度拳がった正妃の話も全て蹴って彼女の父親に並ぶことだけを目標とした。それは彼女を迎えるための、俺の意地のよくなものだった。

そして、数ヶ月前。

ようやく手に入れた彼女はかつての快活さが薄まって憂いが増し、より美しくなっていた。

触れてしまえば何かが脆く崩れてしまいそうな不安定な表情が俺を誘い、そして惑わせる。

その憂いが分からないからこそ、俺は彼女に唇以上を求められないのだ。

かつての淡い恋が、日を追うにつれて深い愛情に変わっていくにもかかわらず。

それはこの4年、ことあるごとに思い描いていた未来像が、まだ偶像でしかないことを示していた。

俺は執務室のソファに深く沈み、天井を見上げ溜め息を吐いた。

目の前の軽薄そうな金髪男は、ひたすら楽しそうに鳶色の目を細めてこちらを見ている。

「……レミリカ」

そして俺は、未だ自分のものになっていない、愛しい人の名を呼んだ。

輿入れから、早1ヶ月が経っていた。

フォグレストでの生活にも慣れ始め、ようやく身の回りの人間たちの顔と名前が一致するようになり、けれど一方で、懐妊の兆しどころか妃としての務めすら果たされない日々も続いている。

目まぐるしく移ろっていく毎日に、彼は必要不可欠な存在であるはずなのに。

私はまるで必要とされていない。

いらなと言われることを恐れて息を殺しながら、彼の優しさに縋ってしまいそうになる自分を必死に諫めるのだ。
かつて抱いた感情がより広く深くなって、もうそれは恋ではなく愛と呼べるものになったというのに、それをぶつけしまったら砕け散りそうに怖いから。

例えばそう、こんな瞬間にも。

「今日はどんなことが？」

ライオネル帝は私室のソファにゆったりと腰掛けながら、穏やかな口調で私に問うた。

私はその隣に心地悪くも居座りながら、顔を俯かせていた。

「特に……何もございませんでしたわ」

あなたが気にするようなことは何も。

ところが、彼を煩わせないように答えたはずの言葉が、彼にひどく寂しそうな顔をさせたので、私はなぜか悪いことをした気分になって、慌てて言葉を繋いだ。

「あの……」

大臣の奥様たちとお茶会を致しましたわ。皆様に誘っていただいて」

すると、途端に彼の目が輝き出して、その面には優しい笑みが浮かんだ。

分かりやすい人。

私が思わずクスリと微笑むと、彼は急かすように続きを促す。

「それで？ どんな話を？」

「いえ、農務大臣のお孫さんがとても可愛らしいとか、外務大臣の姪ごさんが今年社交界にデビューなさるとか」

「へえ……」

そこで一瞬、彼の顔に苦いものが走る。

けれどそれは本当に一瞬のことで、その後はすぐに消え、穏やかな笑みばかりがまた顔中を満たしていた。

でも私はその一瞬に固まったまま、彼の顔を凝視し続けていた。

察した彼は、私を覗き込む。

「どうかなさいましたか」

彼の問い掛けに、ふと意識を取り戻した私は、ふるふると首を振った。

「いいえ……何も」

「本当に？」

「ええ」

「無理をしているのでは？」

その唐突な問いは、まるで私が無理をしていると言っているようだった。

「そんなことはありません」と細い声で否定を返せば、彼は「そう」とだけ呟いて深く息を吐く。

なんとなく居心地の悪い沈黙が続く

「姫」

囁かれたことに気付いた時、彼の顔はもう少し動けば触れ合ってしまいそうに近かった。

どれだけ経っても、「姫」としか呼ばないんですね。

いっそ叫んでぶつけてしまいたい想いを、必死で堪えながら。

「キスを、しても？」

いつものように問い掛けてくる彼に、小さく頷いて。

触れ合わせた唇は、思っていたよりもずっと、熱かった。

重ねた息は蕩けるほど熱く、
交わした視線は深く刺さった。

視界いっぱい碧はその濃さを増し、ほんの少しだけ遠くなった私
を苦しそうに、なのに愛おしそうに見下ろす。

なんで、そんな顔。

勘違いさせないでと、叫ぶのを堪えるように、目を閉じれば。

「……は……」

漏れ出た吐息は、どちらのものか。

最早溜め息なのか、荒くなった呼吸なのかも分からない。

そして意識せずと開き、合った目は、示し合わせたようにもう一度
瞼に隠された。

また、繰り返す。

擦り合わされる。

まるで存在を確かめるように、拒絶しないかを確かめるように、何度も何度もそれは繰り返される。

ただそれもそのうちに覆い被さるものに変わって、彼はまるで食べるみたいに私の唇を吸い、時折甘く咬んでは私が喘ぐ姿を愉しそうに眺めるのだ。

それはとても甘美な誘惑。

舌で合わせ目を焦らすようにノックされては、もう開くより他に何も出来ない。

誘い込んで、彼が教えたように応えれば、より深く絡まるのもまた常だ。

けれどその間中、私はずっと彼の夜着を掴むばかりなのも初めから変わらない。

彼の首に縋ってしまえば、魔法はたちまち解けてしまうことを知っているから。
愛しいを溢れさせてしまえば、それはたちまち空気に溶けてしまうことを知っているから。

抱き締めて、と。

願いは、口に出ることもない。

所詮私は、円滑な統治のための道具。
ただこんな風に、唇だけでも求められることが、喜びでなくてはならないのだ。

だから、それ以上を望むのは、ただの私のわがままで

キスは続く。

隅々まで舌で探られて、もはや十分すぎるほどの渴望は確かに私の中に渦巻いているのに、それをねだることは出来ない。

彼の着る高級なシルクの夜着の肩口に、幾筋もの濃い皺がつくられている。

「…………！」

だからこそ、夜着の裾から入り込んできたゴツゴツとした手の平の感覚に、私はすぐに意識を攫われたのだった。

素肌に触れる、火傷しそうなほど熱い手。

変わらず続けられて、けれどさっきよりも激しく私を覆う唇。

耐えきれず彼の首に縋っても、いつものように彼が動じることもない。

彼も夢中だというように舌を絡め、乱暴な手つきで丁寧に指が這わされる。

まるで触れられる喜びを、私に教えようとするかのようなその動作に、思わずびくりと身体が震えた。

そして。

条件反射的に流れた涙が、私たちの間を通り、唇に流れ着いて塩味を香らせたその瞬間。

……彼の温みが離れ、隙間なく重なっていたようだったそこに、冷たい空気が流れた。

「もう、眠りましょう。明日も早い」

哀しげに笑む彼は、一体何を考えているのだろう。

言い訳めいた口調は、私の心を抉るのに十分だった。

眠れないままの、一夜が過ぎた。

うつ伏せになって枕を濡らし、泣き声を隠すようにシーツを被り。
泣き腫らして、いつものようには上手く開かない目で見える空が白ん
できても、一向に眠気はやってこなかった。

どれだけ絶望すれば、気が済むのか。

そもそも希望を抱かなければ、嘆きを迎え入れることもないのに。
身の程をわきまえていたのなら、こんなにも深く彼を愛することも
なかったのに。

その昔、母様に読んでいただいた、小国の姫が大国の王と幸せな結
婚をする絵本。

自分がこんな風になるまで、ここ何年も頭の片隅に埋めてあった記
憶が溢れ出てくる。

彼女はどうかやって幸せになるのだったろう。

魔法使いだとか、妖精だとか、お伽話の中にしか存在しないようなものたちから妨害を受けて、それでも最後には、愛する人に愛された。

向こう側の寝台の上、規則正しく動く、シーツが象っている逞しい背中をじっと見つめて。

私だけのために逃えられた寝台。

それでも、隣に彼が眠ったとしても十分に余るほどの広さがある。

まるで私の心の空白を体現するような、1人分の熱しか吸収しない真っ白なシーツは、キスの名残を残すように少しだけ乱れていた。

いつか、

いつか彼がああ寝台でさえ眠らない日々が訪れるのだろうか。
彼が後宮に迎える、彼の本当に大切な女性と共に微笑み、立っていられることが私には出来るのだろうか。

自問自答を繰り返し、その内ふと、空気が変わったことに気が付いた。

彼がむくりと起き上がり、寝台を降りる気配が背中越しにぴりぴりと伝わる。

まだ起きるには早いはずの時間。

出ていってしまうのかと、彼に縋ることすら考えた。

……臆病な私が、それを出来ないことも分かっているのに。

元々うまく開かなかった目を閉じて、眠るふりを続ける。

鎧のようにシーツを抱え込み、胸元でぎゅっと握り締めて自分を押し留めた。

早く、過ぎ去って。

まるで永遠にも近い間、私はドアの閉まる音だけを求めて、耳を澄ましていた。

けれど私の荒い息遣いと、彼の忍ぶような足音を割るように私を支配したのは、ギシリと寝台が軋む音で　私の身体が少し深く寝台に沈み込む感覚だった。

『レミリカ』

いつも私を「姫」と呼ぶ低い声が、記憶にない甘さで名を呼んだ。寝転んだ私の背中が、彼の熱を感じられるほど近くに腰を下ろした彼は、武骨な指で髪を梳きながら、それを追いつけるように唇を滑らせている。

夢なんじゃないか。

それが願いなのか、現実逃避なのかも分からない。

ただ言えるのは、彼が私の名を呼び、今私に触れているということ。私が夢を見ているのではないということ。

そして。

髪に甘く痺れるような余韻を残し、彼の唇が次に辿り着いたのは、まだ涙の跡の残る頬だった。

彼は深く溜め息を吐き、その跡をなぞるように顔の輪郭をはむと、音を立てて唇の端に口付けを落とすとした。

『レミリカ』

やはり甘い声は、まだ明けきらない仄暗い闇の中、私の心を鷲掴みにした。

心地よい微睡みに、いつの間にか誘われていたらしい。

柔く入り込む、フォグレスト独特の陽射しに起こされて一瞬惚けた頭は、侍女のきびきびとした声によって完璧に覚醒をした。

「レミリカ様、朝でございます」

ミスティアナから唯一連れてきた侍女のナウラは、ミスティアナ時代と相も変わらず容赦無くシーツを剥いで、私を急かした。私の朝が弱い性質は、かつてとんなら変わりはないのだ。

……嫁いできてから、いつそうひどくなっただにしても。

「陛下はもう執務をしてらっしゃるんですよ。」

レミリカ様がこんなにくーたら寝ていてどうするんですか」

「陛下は早起きだもの」

「そういう問題ではないでしょう!」

「だって、今朝もまだ夜の明けきらないうちに部屋を出ていかれた

わよ」

「……それをご存じなら、どうしてその時間に起きないんですか……」

「そんなの気分よ」

そんな私に、横で深い溜め息を吐くナウラは、無視をした。

言いたくなかった。

あんな風に、大切そうに扱われたことなど、誰に言えるだろう。なぜかも分からず、なのに故を問うことも出来ない、そんな背反の感情を抱えて、誰にこの葛藤をぶつけられるというのだろう。

58

あの手が心地よかった。

ミステリアナにはない、フォグレストの暖かな陽射しにも増した穏やかさ。

そしてその手を追い掛けた唇は、いつものキスの熱もなくなただ優しくかった。

だから、期待してしまいそうになる。

あの温もりをもっと求めてしまっていたのかと。

そんな思いにも、裏切られることはあるのだから。

「そういえばレミリカ様、侍女たちがしていた噂なんですけれど…」

私の髪に櫛を通しながら、先ほどとは打って変わって言いにくそうに口を開いたナウラは、それでもなお、言つのを逡巡しているようだった。

「ナウラ」

そこまで言ったのならすべて言いなさいと、そんな威圧を滲ませた口調で名を呼べば、彼女は目を逸らしたままぽつりぽつりと呟いた。

「ライオネル帝が、側妃を後宮にお入れになるという話があるそうです」

「……そう」

「あくまでも侍女たちの噂ですから、信憑性は分かりませんよ」

「……ええ」

「ただ……」

フォグレストの上位貴族に加えて、ドリズリンやトルネディアにも後宮の一室を狙う動きがあるのは確かなようですね」

「……分かってるのよ」

分かってる。

まるで独り言のように漏れた言葉に、ナウラが反応することはなかった。

彼女はその後ただひたすらに、皇妃の侍女としての仕事を果たすばかりだった。

分かっている。

分かっているのだ。

私が彼の子供を産めないということとは、つまりそうということだ。

どんなに愛情を傾けたところで、それがただ彷徨うだけの、抜け落ちた魂のようになってしまえば、そこには何の意味もない。

夢のような時間の後、それはひどく現実的な形をもって、私の心を
侵食した。

閑話： 皇帝陛下の憂い事？（前書き）

ライオネル帝視点です。

閑話 : 皇帝陛下の憂い事？

危なかった。

執務室のソファに身を投げ出すなり、思わず俺はそう呟いていた。

窓の外に見える世界はまだ白く、陽は少し自分の存在を主張し始めた程度だ。

きつと肌を感じる空気は冷たいに違いないのに、今の俺の身体は可笑しいくらいに火照っている。

あのまま、突き進んでしまいそうになった。

合わせた唇は甘く、触れた肌は柔らかく。

もはや踏み止まることも出来ないほど深く、彼女の中に入り込んでいた。

彼女の涙が唇に触れて初めて、普段辛うじて理性を取り戻していた段階すら、踏み越えてしまっていたのだと気付くほど。

何が俺を踏み越えさせたのだろうか。

それとも、抑え押さえ付けてきた欲望が、もう決壊を迎えているのだろうか。

どちらだと、そんなことを考えながら、必死にさつき見た、彼女の
悩ましい姿を頭の片隅に追いやる。

いつの間にか、甘えるように首に回っていた細い腕。

指を這わせれば、容易くその感覚を受け容れる柔らかな身体。

快樂の入り口しか知らないくせに、誘うように濡れている瞳も、唇
も。

もう他の女など抱けるものか。

梳いた髪から漂った甘い香しか、俺を惑わすことなど出来ないだろ
う。

陰鬱とした空間は、けれど確実に時を刻み。

「あら、どうしたの珍しい。早いね」という、今この瞬間には世界
一間抜けな声が聞こえて、俺は我に返るのだった。

「なに、結局失敗したの」

あれほどけしかけたのに、と明け透けな物言いはやはりクリスである。

事の顛末をすべて言い終え（というか無理矢理言わされ）、とりあえず突っ込まれた。

「なんでそこで止めちゃうわけ？」

涙なんて別に悲しいからってだけで出るもんじゃないでしょ」

「いや……」

「別に相手の気持ちを慮るのはいいことだけどさー宰相としてはお世継の心配もしなきゃいけないわけ。

分かる？」

まだ焦れるようなら、本気で側妃のことも考えなきゃいけないよ」

「無理だ！」

思わずソファから立ち上がって大声を上げた俺に、奴は冷たい目を向けた。

一応言っておくが、主従関係で言うなら俺の方が上…のはず。

けれどクリスはお構いなしに、こちらに体勢さえ立て直させず更に斬り込んできた。

「無理とか出来ないと言えぬ立場にないからね、あんた。本気の女を嫁にしてるくせに子供つくれないっていうなら、義務って割り切った別の女と子づくりしてもらうしか選択肢ないよ。国家存亡の危機には瀕したくないからね、僕」

「……だから、無理だと言ってるだろう」

すると、まるで駄々をこねる子供のような俺に、深く溜め息を吐いた奴は、心底疲れたという口調で余命宣告をした。

「とりあえず1週間後、君の側妃選びのための夜会開催決定したから」

「誰が！いつ！」

俺は許可してないだろ！」

「僕が、今。」

じゃあ例の老人会に話通しておくね。彼らは自分の血を皇族に入れたくてしょうがないみたいだから」

「おい、待て……」

「老人会に意見出来るものならしてみな。」

少なくとも、外務大臣と工務大臣は譲らないだろうねえ。養女まで迎えちゃう人たちだもん」

「クリス……」

苦々しい呟きと同時に、奴は皇帝とその宰相のみが入室を許される執務室から、悠々と出ていった。

確かに、いつも奴の即断即決の行動力には助けてもらっている。彼女を正妃として迎えることが出来たのも、奴の尽力のおかげだといっても過言ではない。

俺に否が応でも自分の血縁の娘を娶らせようとする、老人会（と勝手に俺たちが呼んでいる）の議員連中を黙らせ、そいつらを大臣に指名して手の平で転がそうという大胆な発想したのは奴だ。ミステリアナ帝が出し惜しみをするだろう彼女を、どうやってもこちらに嫁に出さなければいけない状況を作り上げたのも奴だ（奴はミステリアナの皇族女性の婚姻を、次々にバックアップしていった）。

だからといって、その状況を今度は盾にとられようとは……

奴には本当に頭が上がりなくなる。

と、思っってはっとした。

だから、主従関係では俺の方が上なんだって。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4179t/>

only KISS, only YOU

2011年8月23日22時26分発行